ホッブズの生涯（一）

梅田　百合香

はじめに
第一章　政治思想家としての出発（一五八八―一六四〇）
　第一節　マームズベリそしてオックスフォード大学
　第二節　キャヴェンディッシュ家とトゥキュディデスの翻訳
　第三節　幾何学との出会いと『法の原理』
第二章　フランス亡命と名声の確立（一六四〇―一六五一）
　第一節　デカルトとの対決
　第二節　『市民論』と自由意志論争
　第三節　革命と『リヴァイアサン』　（以上本号）
第三章　論争の時代（一六五一―一六六〇）
　第一節　エンゲイジメント論争
　第二節　神義論と政治学

第三節　『物体論』と数学論争
第四章　王政復古そして知識人としての使命（一六六〇―一六七九）
第一節　『リヴァイアサン』ラテン語版と『ビヒモス』
第二節　知識人としての使命
おわりに

はじめに

本研究の課題は、トマス・ホッブズの生涯を通観し、様々な時期に彼が当面した問題をフォローすることによって、彼の思想と行動を理解することにある。そして、ホッブズが、その思想形成上においてどのような実践的課題を抱えたのか、またその課題を果たすために、著作においていかなる論理構成をとるに至ったのかを見ていくことにしたい。筆者は、ホッブズの歴史的実像を探ることは、彼の著作をより正確に把握する上で、必要不可欠な作業であると考える。そもそも思想家や哲学者は、現実の社会において生活し、その中で時代が抱えた問題を見据え、思索し、自らの実践的な課題を定めて、彼らなりの解答を、抽象的あるいは具体的な表現形式をとって書物に託す。したがって、いかに抽象的であったとしても、著作に表れた世界は、それを描いた人間の思想的背景を反映しており、著作を分析するためには時代状況の把握が欠かせない。とりわけホッブズ研究においては、この点が現在、非

常に重要視されている。というのは、従来のホッブズ研究は解釈学的一貫性の追求に偏向していたため、クエンティン・スキナーが、ホッブズを歴史的文脈で理解すべきであると主張し[1]、ホッブズ研究における方法論の画期的な転換を果たしたからである。こうしてスキナー以後、ホッブズの歴史的実像に迫る研究が多く出始め、一九九〇年代には書簡集や新しい伝記も公刊され、まさにホッブズの実証的研究が開花したような状況にある。本稿もこうした研究動向に沿うものである。

A・P・マーティニッヒは、ホッブズを当時の時代状況の中に生き生きと甦らせた新しい伝記『伝記ホッブズ』を書き上げた。本稿はこの優れた研究業績に多くを負っている。彼によれば、この伝記の中で『リヴァイアサン』の役割は相対的に少なく、その理由は、ホッブズは『リヴァイアサン』を出版する前から有名であり、それを出してからも、他のものごとによって有名であったのであり、『リヴァイアサン』が彼の全生涯を支配したわけではないからだという[2]。確かにホッブズは『市民論』で有名になり、『リヴァイアサン』を主著として構想したわけではなく、また『リヴァイアサン』以外の論争においても激しく戦っていた。にもかかわらず、筆者は、『リヴァイアサン』がホッブズの生涯を決定的なものにした、という立場をとる。なぜなら、『リヴァイアサン』においてこそ、ホッブズの自然哲学における基本的な発想が政治哲学の中に融合化され、かつそれらと彼の宗教思想とが体系的に結び合わされて、ホッブズの主張がみごとに集約されているからであり、そしてまさにそのような『リヴァイアサン』の出版が、ホッブズとその思想に対する異端ないし無神論という批判を引起し、それは終生、彼に付きまとい、彼は死ぬまでそれと戦ったからである。もし一六四七年（すなわち『市民論』を出版した後で『リヴァイアサン』を出す前）の重病の際にホッブズが亡くなっていたら、彼の名が今日に至るまでこれほど残っていたとは考えられない。したがって、本稿は『リヴァイアサン』を一つのキー・ポイントとしてホッブズの生涯を追うという指向を

もち、そこがマーティニッヒの伝記との明らかな違いとなっている。

ところで、ホッブズは無神論者であったのか。そうであったかもしれないし、それを確かめることはできない。それは内面の問題だからである。「無神論と判断されるのは…発言ないし記述された言葉によって…確かに神の存在を直接否定した場合である。」[3] 彼のこの定義によれば、彼は無神論者ではない。だが、その問い自体がホッブズの存在の意義を理解していないように思える。筆者の見解では、ホッブズの思想の意義は、まず人間の内面にある心と外面的行為とを明確に区別して、人間の行為における責任を問題にし、そこから政治における責任倫理を主張し、さらにそれを国家論として体系化した、ということにある。以下の叙述において明らかにされていくように、ホッブズは一七世紀イングランド及びヨーロッパの時代状況をきわめて政治的な立場から見据え、自らの実践的課題を悟った。そして彼はその課題を、一切の個人的心情を排除して、著作の体系性に託した。こうして彼の思想と行動が集約されて制度論として花開いたのが『リヴァイアサン』なのである。ホッブズは心情倫理と責任倫理を峻別した。それは、彼の目からすれば時代が要請した課題であったし、また彼自身の生き方でもあった。なぜなら、彼の課題はあらゆる党派的な対立を越えることであり、それゆえ著作は個人的な立場を語るべきではなく、むしろすべての人が納得しうるような普遍的な論理つまり数学的な体系的論証形式によって構成される理論に訴えるべきである、と彼は考えたからである。「私の生涯は私の著作と全く一致しています。」(mea vita meis non est incongrua scriptis)[4]。これは彼の政治思想家としての自負である。彼の政治認識が表れている『リヴァイアサン』は彼の後の人生を深く規定した。その核心は、宗教の政治への原理的な包摂であり、人間の人格の自律に基づく責任倫理の政治思想であると思う。したがって、ホッブズという思想家の場合、彼の著作の体系的な構成を捉える中で彼の課題が浮かび上がってくるのであり、また反対に、時代状況との関連性において彼の思想の形成・展開過程をみていく

ことで、著作における体系性を読み取ることができる、といえるのである。このようなホッブズの特質は、これまでのホッブズ研究ではあまり理解されてこなかったように思える。だが、このホッブズの特質を理解するならば、『リヴァイアサン』の前半部分とくに第二部の社会契約論は、当時の革命的な宗教的心情を封じ込めるための前提となる論理であり、そして第三部及び第四部は、この社会契約論を基礎として、宗教的領域つまり教会統治における政治的主権者の権利を確立するために書かれている、ということが見えてくる。さらにいえば、『リヴァイアサン』におけるホッブズの主張の力点は、前半部分よりもむしろ宗教を政治的秩序の枠内に位置づけるための宗教・教会論である後半部分にある、ということが推測される。もちろんこのような仮説を裏付けるためには、伝記的プロセスの検討と『リヴァイアサン』分析との両方が必要である。そこで本研究では、ひとまずアプローチの一方である伝記的研究を行い、後の『リヴァイアサン』分析の土台となる、時代の性格とホッブズの課題を明らかにすることにしたい。

注

テキストの略号

ABL　*Aubrey's Brief Lives*, ed. Oliver Lawson Dick, Godine, 1999.

B　A. P. Martinich, *Hobbes A Biography*, Cambridge, 1999.

C　*The Correspondence of Thomas Hobbes*, ed. Noel Malcolm, 2volls, Oxford, 1994.

EL　*The Elements of Law, Natural and Politic*, ed. Ferdinand Tönnies, Cambridge, 1928.

EW　*The English Works of Thomas Hobbes*, ed. William Molesworth, 11volls., London, 1839-45.

L　*Leviathan*, ed. Richard Tuck, Cambridge, 1996.

OL　*Thomas Hobbes Opera Philosophica quae Latine scripsit Omnia*, ed. William Molesworth, 5volls., London, 1839-45.

V　*Tomae Hobbes Malmesburiensis Vita*, in OL, vol.I, pp.xiii-xxi. 一六七六年にラテン語で書かれた短い散文の自叙伝「マームズベリのトマス・ホッブズの生涯」。

VA　*Vitae Hobbianae Auctarium*, in OL, vol.I, pp.xxii-lxxx. ホッブズが友人（彼の長年の筆記者ジェイムズ・ウェルドンか?）に書き取らせた口述自叙伝の原稿とオウブリィの伝記資料とを元にして、リチャード・ブラックバーンが書いたラテン語によるホッブズの伝記である。この「ホッブズの生涯補遺」は、一六八一年に、「マームズベリのトマス・ホッブズの生涯」とともに一冊にされて出版された。

VC　*Thomae Hobbes Malmesburiensis Vita carmine expressa*, in OL, vol.I, pp.lxxxv-xcix. ホッブズの友人であるフランス貴族フランソワ・ドゥ・ヴェルデュ（François du Verdus）に宛てて一六七二年に書かれたラテン詩による自叙伝「詩で表現されたマームズベリのトマス・ホッブズの生涯」。以上のラテン語による散文の自伝と詩形式の自伝の両者について、本論文では独自の翻訳を行ったが、邦訳は、福鎌忠恕「トーマス・ホッブズ著『ラテン詩自叙伝』」（東洋大学大学院紀要第一八集、一九八一年）が存在し、参照した。

(1)　Quentin Skinner, "Hobbes's 'Leviathan'," in *Historical Journal*, VII, (2), 1964, p.323, in *Great Political Thinkers* 8, ed. John Dunn and Ian Harris, vol.I, 1997, p.370.

(2)　B, p.252.

(3)　OL, III, p.548.

(4)　VC, p.xcix.

第一章　政治思想家としての出発（一五八八―一六四〇）

第一節　マームズベリそしてオックスフォード大学

トマス・ホッブズは、一五八八年四月五日、イングランド南西部ウィルトシャー州、マームズベリ近郊のウェストポートに、母アリスと父トマスとの間の次男として生まれた（B, 2）。母はスペイン艦隊の来襲の噂に脅え、彼を早産したという（VA, xxii.）。ホッブズは自伝の中で自らを「恐怖（metum）との双子」であったと述べている（VC, lxxxvi.）。彼はこのような表現によって、人々を「自然状態」から脱却させ、国家の形成へと向かわせるネガティブな感情である「恐怖」に、むしろ生命の保存動因というポジティブな意味を込めていたのかもしれない。

父トマスはイングランド国教会の教区牧師で、ホッブズは父親から洗礼を受けた。ホッブズには兄エドモンドと妹アンがいる（B, 2-5.）ウェストポートの教区牧師であった父親はあまり評判がよくなく、一六〇三年頃、ある聖職者から名誉毀損で訴えられ、彼に恨みを持った父トマスは傷害事件を起こしてしまう。その結果、彼はウェストポートに居られなくなり、家族を残しロンドンへ逃れた。一四歳でオックスフォード大学に入学したホッブズは、既にその時にはウェストポートの家を出て、オックスフォードで大学生活を始めていたが、まだ十代の若者だったホッブズが、父親の起こした事件によって心を痛めていたであろうことは想像に難くない（B, 4.）。父の出奔でホッブズの家は苦境に陥り、兄弟は伯父フランシスの庇護下に入ることになった。父トマスの兄フランシスは、マームズベリの参事会員であり、手袋製造業を営む富裕な地方の名士であった。フランシスには子がなく、ホッブズがオックスフォード大学モードリン・ホールに入る際に経済的に支えるだけでなく、後に遺産として牧草地をホッブ

ズに残している。そしてホッブズより二歳上のエドモンドが、手袋職人として彼の後を継いだようである。(ABL, 148.)。こうした初期ブルジョワ的背景は、古い伝統に拘泥しない彼の思想形成に何らかの関係があるのかもしれない。

ホッブズは四歳から八歳までウェストポートの学校に通い、読み書きと初歩的な算数を勉強した。それから、マームズベリの学校に行き、牧師エヴァンスに付いて学んだ後、オックスフォード大学モードリン・ホールから来たばかりの若き教師、ロバート・ラティマーの下でラテン語やギリシア語を学んだ。彼はウェストポートで私塾を開き、ホッブズはそこで、二、三人の優秀な少年たちと共に、夜九時まで指導を受けていた(ABL, 148.)。ラティマーは、学力において並外れて優れているホッブズをとくに可愛がり、同年代の生徒たちを飛び越えてホッブズにはより高度なものを教え込んだ。ホッブズは、オックスフォード大学に進む少し前、エウリピデスの『メデア』をラテン語の詩に翻訳し、ラティマーに献呈している(VA, xxiii.)。この作品はホッブズに非常に影響を与え、後のホッブズの著作の中で四度も言及されており、また『リヴァイアサン』では第三十章において、よりよい国家の創出を唱えて主権者に服従せず、国家を改革しようとすることは、結局、国家を破壊することである、と警告する箇所において引用されている(B, 7. L, 234.)。

ホッブズの最初の出版作品であるトゥキュディデスの『ペロポネソス戦争史』の翻訳や、晩年のホメロスの『オデュッセイア』『イリアス』の翻訳にみられるように、彼のラテン語およびギリシア語における語学力の堪能さとギリシアの古典文学に対する関心の高さはよく知られているが、これは幼年期のラティマーとの出会いが大きく影響していたように思われる。ホッブズは一六三四年の夏、四六歳の時、久しぶりに故郷マームズベリに帰るが、このときリー・デラマー(Leigh Delamere)に住む恩師ラティマーを訪ねている。この事実はホッブズの彼に対する

敬慕の情を示していよう。またそこで、ラティマーの晩年の生徒であり、ホッブズと年の離れた若き友人で、同時代のホッブズの伝記作家、ジョン・オウブリィ（当時八歳）に初めて出会うのである（ABL, 150.）。ラティマーはホッブズに再会したその年の終わりに亡くなり（B, 8.）、ホッブズはそれ以後二度と故郷を訪れることはなかったが、師ラティマーとギリシア古典は、ホッブズに対し生涯を貫く影響をもち続けたのである。

ホッブズは一六〇二年一四歳の時、オックスフォード大学モードリン・ホールに入学した（VC, lxxxvi.）。入学者の大半は一六歳以上なので、ホッブズは二年も飛び級したということになる（B, 9.）。ホッブズのオックスフォード在学中、一六〇三年三月二四日にエリザベス女王が死去し、ジェイムズ一世が即位して、時代はテューダー朝からステュアート朝へ移行した。[1] そして一六〇五年八月後半にジェイムズ一世は、王妃、皇太子を伴い、オックスフォード大学を訪れている。大学は十分な準備を整え、新国王の来訪を歓迎した。一方、学問に優れ、知的好奇心旺盛な国王は、御前で行われた討論会に自ら参加するほど積極的であった（B, 14-17.）。それから約二ヶ月後、一六〇五年一一月五日に「火薬陰謀事件」が起こった。これはローマ・カトリック教徒たちが国王の議場における爆殺をねらったものだが、[2] オックスフォードの学生たちは、ほんの少し前に数日間ともに過ごした国王に対するこのような事件に対し、特別な感情を持ったに違いない（B, 18.）。ホッブズもその中の一人であったろう。

ホッブズは大学でアリストテレスの論理学や自然学を学んだ（V, xiii.）。スキナーはホッブズがこれらに非常に影響を受けていると結論づけているが、[3] ホッブズの自伝によれば、彼は大学で論理学を「長期間にわたり学び、習得したけれども、次いで放棄し、なんであれ自らの方法で論証するようになった」という。（VC, lxxxvii.）。いずれにせよ、ホッブズが学力優秀で信頼のおける学生であったことは間違いない。というのは、彼は一六〇八年二月五日に学士号を取得し（B, 18.）、モードリン・ホールの学長ジョン・ウィルキンソンによって、[4] 富裕で有力な貴族、

ハードウィック男爵ウィリアム・キャヴェンディッシュの長男の家庭教師として推薦されたからである（VA, xxiii.）。このキャヴェンディッシュ家に仕えることが、ホッブズを世界にはばたかせる重要なきっかけとなる。

注

一七世紀イングランドでは、三月二五日を元日とする旧太陽暦が使われていた。したがって本論文に出てくる年号は、すべてこの旧暦の年号である。

(1) 小泉徹、第三章「エリザベスの治世」、今井宏編『世界歴史大系イギリス史2近世』、山川出版社、一九九〇年、一一〇ページ。

(2) 小泉徹、第五章「初期ステュアート朝の展開」、今井宏編『世界歴史大系イギリス史2近世』、一五三ページ。

(3) Quentin Skinner, *Reason and Rhetoric in the Philosophy of Hobbes*, Cambridge, 1996.

(4) オウブリィは当時の学長をジェイムズ・ハッシーと記述している。ABL, p.149.

第二節　キャヴェンディッシュ家とトゥキュディデスの翻訳

キャヴェンディッシュ家は名門貴族で、イギリス史上に有名なニューカスル伯爵を輩出している。ホッブズを雇ったのは、ハードウィックとチャッツワースを拠点とするデヴォンシャー伯爵家。もう一つの流れは、第一代目デヴォンシャー伯爵の弟チャールズ・キャヴェンディッシュの家系で、その息子ウィリアムがウェルベックの第一代

目ニューカスル伯爵（一六四三年に侯爵、一六六五年に公爵に叙される）である。彼はホッブズの生徒ウィリアムの従兄弟に当る。ニューカスル伯は、一六三八年に皇太子（後のチャールズ二世）の教育係になるが、このことが後に皇太子がフランスへ亡命する際、ホッブズを皇太子の数学教師として推薦することを可能にしたと思われる。そして彼は内乱時代、イングランド北部の国王軍司令官として活躍したが、一六四四年のマームストン・ムーアにおける一大決戦で敗れ、パリに亡命する（C, 814-815.）。彼は学問に対して深い関心を寄せ、学術の保護者としても有名であった。一六三〇年代には自ら小規模な学問サークルを持ち、ホッブズも当然これに参加した。またパリ亡命時代にはマラン・メルセンヌ（Marin Mersenne）の学問サークルを訪れ、フランス知識人と交流している（B, 24.）。ホッブズの著作活動には、キャヴェンディッシュ両家の大きな後ろ盾があった。国家の運命を背負う、というホッブズの課題意識はそのことと無関係ではない。

ホッブズは、家庭教師としてウィリアムに多くの学問を教えるだけでなく、友人として狩りや乗馬、街での娯楽においても常に付き添った（VA, xxiii-xxiv.）。ウィリアムがいつもホッブズを連れ立っていたおかけで、ホッブズはイングランドの重要人物や国王にさえ何度も会う機会を得た。ウィリアムのナイトの叙勲、チャールズの皇太子就任式、ウェストミンスター寺院でのアン王妃の葬儀、ジェイムズ一世のニューカスル伯ウェルベック邸滞在、チャールズ皇太子のハードウィック・ホール訪問、これらの様々な機会にウィリアムの側に侍り、目立たない存在ではあるが晩餐にも出席していたと思われる（B, 27-28.）。

ところで、イングランドの名家の子弟は、学問修得の最後の仕上げとして、大陸旅行に出かけ、現地で語学を学び、実際にヨーロッパを見聞して回ることを慣習としていた。ホッブズは家庭教師として結局三回、大陸旅行に随行している。第一回目はウィリアムと三年かけてフランス、イタリア、ドイツを回った旅行である[1]。ヴェネツィア

共和国滞在中、二人は共和国神学者パオロ・サルピ（Paolo Sarpi）の秘書フルゲンティオ・ミカンツィオ（Fulgentio Micanzio）と知り合う。サルピは、ヴェネツィアの宗教的独立に関する指導的理論家であった。ヴェネツィアは反ローマ・カトリック教会のリーダーであり、イングランドはヴェネツィアの直接的脅威であるカトリック国スペインと敵対していたので、イングランドとヴェネツィアとは友好関係にあった。彼らは帰国後からウィリアムが亡くなる一六二八年まで国際情勢について文通を続けている（B, 37.）。一六一四年時点で、ウィリアムはダービシャー代表の下院議員であり、父ハードウィック男爵は貴族院議員、従兄弟のニューカスルはイースト・レットフォード代表の下院議員であった。一六一三年にフランシス・ベイコンは大法官に就任していたので、ウィリアムとホッブズはベイコンとこの頃から面識があったと思われる（B, 28-29.）。ミカンツィオの狙いは、ウィリアムから、あるいはウィリアムを通じてベイコンから、ジェイムズ一世に外交政策変更を働きかけてもらうことであった。ミカンツィオはラテン語ではなくイタリア語で手紙を書いたので、翻訳するのがホッブズの仕事であった。書簡の内容の大部分は三十年戦争における軍事行動についてである（B, 38.）。一六一八年に神聖ローマ皇帝フェルディナントに対してボヘミアのプロテスタントが反乱を起こした。ローマ・カトリックのフェルディナントがスペインの支援を得たので、ボヘミアのプロテスタントは、ヨーロッパのプロテスタント陣営の指導者ファルツ選帝侯フリードリヒ五世に救援を求めた。フリードリヒはジェイムズ一世の娘婿であり、当然ジェイムズの助力を期待したが、ジェイムズはファルツ援助を拒否し、あくまでヨーロッパ大陸の平和的調停者の位置を確保するという外交政策を保持したのである。[2] しかしなによりも、ジェイムズには戦争する財源がなかった。戦費の承認を議会から得ることができなかったのである。[3] ホッブズは、手紙の翻訳だけでなく、ウィリアムの政治活動においても秘書として関わっていたので、これらの経験は彼の政治思想の形成に重要な影響を与えたと考えられる。例えば『リヴァイアサン』にお

いて、他国との戦争ないし講和を行う権利及び戦費を調達する権利は主権者の本質的な権利とされている（L, 126.）。それだけではなく、このことは、より一般的に、ホッブズの主権理論が国内秩序の問題を対外的諸関係をも視野に入れて構成されていることを予想させる。したがって、『リヴァイアサン』の分析において、ホッブズの国際的視点を十分配慮する必要がある。

またホッブズは、一六二〇年頃から一六二六年くらいまでベイコンの秘書として時折働いていた（B, 65.）。彼はベイコンの『随筆集』（Essays）のラテン訳を手伝ったり、口述を筆記したりしていた。ベイコンは、ホッブズほど自分の考えていることを容易に理解する人はいないと彼を評価している（ABL, 149-150.）。こうしてホッブズは国を動かす人物たちと接することで、天下国家を語る政治的視野を育んでいったのである。

ホッブズは大陸旅行から帰国後、前述したようにウィリアムの秘書となった。ウィリアムは今やダービシャーの州知事であり、下院議員であり（一六二一年及び一六二四年）、またサマー諸島の植民を進める会社バージニア・カンパニーの株主であった（B, 43.）。ホッブズもまた会議で一票投じられるようウィリアムからその株を与えられ、一六二二年に株主の一人となっている（B, 60-61.）。ホッブズはウィリアムの政治家としての活動やビジネスにおいて常に付き添い、彼を補佐した。しかし他方で、ホッブズは余暇を見つけては、ギリシア、ローマの「歴史家や詩人を、（言語学者の解説を利用しながら）熱心に読んだ。」彼によれば、それは明晰なラテン語の文章を書く能力を習得するためであったが（V, xiii-xiv.）、それだけにとどまらず、この古典古代の作品に対する勤勉な取り組みは、ラティマーの影響を端緒とする、ホッブズの人文主義的関心の高さを示している。八五歳のホッブズが、自伝であえてこれに触れているのは、彼の人文主義的研究における造詣の深さを、同時代の人々とりわけ知識人に知らしめるためであろう。そこには、当時の知識人の大半を占める聖職者たちに対するホッブズの挑戦が読み取れる。彼ら

の多くはスコラ哲学を信奉していたが、ホッブズは長年、スコラ派によるキリスト教へのアリストテレス哲学の混入を批判し、『リヴァイアサン』ではその宗教論において、丹念な聖書分析によって独自のキリスト教思想を提示している。しかしそれだけではなく、ホッブズは他方でギリシア古典にも精通していることを示すことによって、キリスト教が混入される以前のギリシア古典の学問的意義を伝え、キリスト教思想に対抗する思想的伝統としてギリシア思想を、敵対する聖職者たちに突き付けようとしたのではないだろうか。

一六二六年二月、デヴォンシャー伯爵が亡くなり、ウィリアムが二代目デヴォンシャー伯爵となった。その年の八月、ホッブズとウィリアムたちは、北西部にあるピーク地方（イギリスのアルプス）へ小旅行に旅立った（B, 69.）。ホッブズはこのことを記念して、『すばらしきピーク』（*De Mirabilibus Pecci*）というラテン語の詩を書いている。それは旅行中観光した風物の描写をからめてキャヴェンディッシュ家の系譜をたどり、一族に対する深い讃辞を示すものであった（OL, V, 319-340.）。しかしピーク旅行の約二年後、ホッブズにとって最大の悲しみともいうべき事件が起こる。一六二八年六月二〇日、父の後を追うかのように、二代目デヴォンシャー伯爵が三八歳で亡くなるのである（B, 77.）。ホッブズは愛してやまなかった友を失っただけでなく、二十年間仕えてきたデヴォンシャー伯爵家を去らねばならなくなる（VC, lxxxviii.）。

ホッブズは伯爵が亡くなる数ヶ月前に、トゥキュディデスの『ペロポネソス戦争史』の翻訳を終え、ロンドンの印刷業者に出版の登録を済ませていた。しかし伯爵が亡くなったため、公刊を延期し、彼の幼い息子である三代目デヴォンシャー伯爵宛に、亡き伯爵について語った献辞を書いて付け加え、一六二九年に出版した（B, 77.）。

彼は自伝のなかで、古典の歴史家ではトゥキュディデスを最も好んだと述べているが（V, xiv.）、ホッブズがトゥキュディデスを翻訳したのは単に古典研究としてではなく、彼の描く政治的人間像、現実主義的な政治認識にシ

ンパシーを感じたからである。ホッブズは献辞において、トゥキュディデスの『ペロポネソス戦争史』は「貴族にとって、そして偉大で重要な行為をなすに至るような人にとって、有益な教えを含んでいる」と推薦する（EW, VIII, v.）。なぜなら他の歴史書は「単なる物語」や「曖昧な憶測」に満ちているが、トゥキュディデスのみが「テキストの中で道徳的あるいは政治学的な講義を行って断線するようなことは決してなく」、読者をその場のいるような感覚にさせ、政治的な現実における人間の行為とその帰結を客観的に描写することによって、とりわけ政治に関わる者に現実的な行動の指針を提供するからである。ホッブズは、トゥキュディデスを「かつて存在した中で最も政治学的な歴史記述者」だと主張する（EW, VIII, vii-viii.）。つまり『ペロポネソス戦争史』は彼にとって歴史書であると同時に政治分析の書なのである。トゥキュディデスは、史実の客観的な描写の中に、対立する政治演説を挿入し、政治的責任の所在を明らかにしようとする叙述スタイルをとる。つまり「彼の歴史学は、政治を担う人々の責任の在り方をたえず問い続ける政治学でもあると言える。[4]」国王の側近として華やかな宮廷人であり、君主権力との距離の近い政治的な貴族キャヴェンディッシュ家に属したホッブズは、将来の政治的指導者を教育する立場から政治に関心を持った。ときにヨーロッパは三十年戦争の最中であり、チャールズ一世は即位後まもなく戦費や宗教問題で議会と衝突し、イングランドの政治情勢は緊迫感を増していた。[5] ホッブズは、トゥキュディデスによる戦争についての政治学的分析を示すことによって、この状況に応えようとしたのである。つまり「優れた判断力と教養をもつすべての人」（EW, VIII, xi.）に向けて、政治的指導者として自らの政治的行為の影響力を予測した責任ある行動について、及び政治的秩序全体を安定させる現実主義的な政治認識について教示したのである。ホッブズはこの作品をウィリアムに捧げている。ウィリアムはホッブズにとって国家レヴェルで物事を考え、行動することのできる政治的貴族であった。ホッブズがキャヴェンディッシュ家とともにあったことの意味、それは全イングランド

の運命に対して、思想的に受けとめることのできる人間へと、ホッブズの心と視座を開いたことにある。

注

(1) 出発した年をブラックバーンは一六一〇年、マーティニッヒは一六一四年としている。VA, p.xxiv. B, p.30.

(2) 小泉、前掲書、一五九―一六〇ページ。

(3) 同書、一六四ページ。

(4) 磯部隆『ギリシア政治思想史』、北樹出版、一九九七年、二四三ページ。

(5) 小泉、前掲書、一七一―一七三ページ。

第三節　幾何学との出会いと『法の原理』

ウィリアムの死によって、ホッブズはデヴォンシャー家を去った。しかしホッブズは、きわめて裕福な名家ジャヴェス・クリフトン卿の長男の家庭教師として、大陸旅行に随行するという仕事をすぐに得た。クリフトン卿はニューカスル伯の隣人であり親しい友人であったので、おそらくニューカスル伯がクリフトン卿にホッブズを推薦したのであろう（C, 821.）。

一六二九年、ホッブズはクリフトン卿の一七歳になる息子ジャヴェス（父と同名）と隣人の息子ウォルター・ワーリングと三人の従者を引き連れて、彼にとって二回目となる大陸旅行に出かけた（B, 83.）。この時イタリアでは

マントヴァ継承戦争が勃発しており、彼らはイタリア行きを断念せざるを得なかった（C, 14.）。彼らはパリからリヨン、ジュネーヴを回り、オルレアンに戻った。この旅行中、一六三〇年におそらくジュネーヴで、ホッブズは幾何学に出会う（B, 84.）。

オウブリィの記述によると、ホッブズがある紳士の書斎に入った時、ユークリッドの『幾何学原本』が開かれていて、それはちょうど第一巻四七番の命題（ピタゴラスの定理）であった。彼はそれを読み、こう言った。「Gによって…。こんなはずはない！」しかしその証明を読みすすめるうちに、その命題の正しさに納得した。こうして彼は幾何学と恋に落ちたのであった（ABL, 150.）。ホッブズはユークリッドの幾何学によってある体験をしたのである。それはいかなる人をも納得させることができる普遍性の体験であった。「彼はユークリッドの方法に、その定理ゆえにというよりはむしろその推論する仕方ゆえに心惹かれ、細心の注意を払って徹底的に研究したのである。」（V, xiv.）。学問の課題は、様々な意見を持つ人々すべてを納得させる結論の確証性を獲得することにある。したがって学問は、幾何学の方法つまり定義づけにおける公理とそれに基づく合理的推論を必要とすると彼は考える。そこで彼は『リヴァイアサン』においても同様な方法論を取った。つまり論証形式として幾何学モデルを使ったのである。彼は、人間の生理的及び心理的基礎にまで溯って一般的な原理の設定すなわち定義づけを行い、それに基づく合理的な推論によって導かれる国家像を示すことで、あらゆる党派的な立場を超えた政治理論を確立できると考えたのである。党派的対立を越えるということ、そのこと自体が彼の政治思想の課題であった。幾何学の普遍性はホッブズの心に深く刻み込まれた。だからこそ晩年近くのジョン・ウォリスとの数学論争において、どれだけ非難を受けようとも、彼は幾何学にこだわり続け、自らの証明に固執したのだと考えられる。

こうして一六三〇年一一月、ホッブズ一行はイングランドに帰国した（C, 17.）。そして翌年、彼はデヴォンシャ

ー伯爵夫人の要請で、三代目デヴォンシャー伯爵の家庭教師としてキャヴェンディッシュ家に戻ることになった（V, xiv.）。愛着あるキャヴェンディッシュ家に返り咲いたホッブズは、一三歳になったデヴォンシャー伯爵に、ラテン語、修辞学、論理学、天文学、地理学及び幾何学を七年にわたって熱心に教えた（VC, lxxxviii-lxxxix.）。そして一六三四年三月には、ホッブズと伯爵は大陸旅行の計画をたて（C, 21.）、この年の秋にホッブズは三度目の大陸旅行に旅立った（V, xiv.）。二人はフランスとイタリアをほぼ二年かけて回るのであるが、今回の旅行はホッブズにとってきわめて重要なものとなる。というのは、当時の優れた学者たちと面識を得ることができたからである。ホッブズと伯爵は、パリから、リヨン、ヴェネツィア、ローマ、フィレンツェと回ってパリに戻るというコースをとった。一六三六年四月ごろ、フィレンツェに滞在した彼らは（B, 90-91.）、ここでガリレオと交際している（VA, xxviii.）。ガリレオは一六一六年に、ローマのベラルミーノ枢機卿からコペルニクス理論を擁護しないよう警告を受けていた[1]。しかし、それについて論じた『天文対話』を一六三二年に出版したため、発禁処分を受け、自己の主張の撤回を余儀なくされ、自宅軟禁の状態に置かれていた（B, 91.）。ホッブズは、一六三四年一月にロンドンにいた時、ニューカスルに頼まれてこの『天文対話』を探し求めたが、手に入れることができなかった（C, 19.）。というのは、この本は既にイタリアの宗教裁判所によって没収され、さらなる販売が禁止されていたので入手が極めて困難だったのである[2]。ホッブズはいずれの著書においても直接ガリレオについて言及していないが、後に『リヴァイアサン』において、ガリレオに対する処分についての異議申立てと受け取れる叙述をしている。コペルニクスの地動説についての「賛否の理由を表すきっかけとして、そういう学説を仮定しただけで、彼らはそのために教会的権威によって処罰されてきたのである。しかし、処罰のどんな理由があるというのか。」（L, 473-474.）。ホッブズは主権者を学説や争論の判定者と位置づけ、政治的及び宗教的権力のすべてを主権者に一元化する（L, 124-125.）。

しかしそれは、政治的に必要なかぎりで裁定権を主権者に保留するというもので、実際はむしろ、平和を害さないかぎり、真理は自由に追究されるべきだということを含意していたのかもしれない。ホッブズは権力の一元化によって、自然科学的諸領域における思想の自由を考えていた可能性がある。

ホッブズはパリで、当時ヨーロッパ中の知識人が訪れたといわれる学問サークルの主宰者、カトリックのフランチェスコ団ミニモ会修道士マラン・メルセンヌに紹介され、彼を介して当代随一の知識人ピエール・ガッサンディ（Pierre Gassendi）やルネ・デカルト（René Descartes）と交際する機会が与えられる（C, 835, 863.）。彼らは知的領域において、宗教的党派性を否定する仲間たちであった。そして、望遠鏡の開発や光学など「新しい科学」（New Science）の追究が花盛りのサロンで、一流の学者たちと交流することによって、ホッブズは自然科学分野についての考察を飛躍的に発展させていったと思われる。自伝によれば、ホッブズは「パリに滞在している間、自然科学の原理を探究し始めた。彼はこの諸原理が運動の性質や変化の中にあると理解したので、主として、どのような運動が、動物の感覚、思考、幻想、その他の特性をもたらすものでありえるかを探ったのである。」（V, xiv.）。

一六三六年十月に、ホッブズたちはイングランドに帰国した（C, 815.）。これでホッブズの家庭教師の仕事は終了である。そこでニューカスルは、ホッブズにウェルベックのキャヴェンディッシュ家に移り、研究生活を送らないかと誘った（C, 37, 39.）。ホッブズも当初その気であったが、結局デヴォンシャー伯爵の下にとどまることになった。しかしニューカスルとの研究交流は彼の学問サークルに参加することでさらに深まっている。ニューカスル・サークルの主な関心は光学であった（B, 98.）。ホッブズは、一六三六年一〇月二一日のニューカスル伯宛の手紙の中で、「光や色はただ脳の中における運動の結果にすぎない」と述べている（C, 38.）。

ところで、ホッブズが光学に関心を持つようになったのはなぜだろうか。もちろん、大陸旅行中の知識人との交

流が、ホッブズを自然科学の研究へと向かわせたことは確かである。だが、彼が生理的な人間学へ関心をもったのは、もう少し早い段階だったように思われる。ホッブズはメルセンヌ宛の手紙においてこう言っている。「光、音及びすべての幻想あるいは思考の性質と生成についての教説は、きわめて優秀な兄弟ニューカスル伯爵ウィリアムと…サー・チャールズ・キャヴェンディッシュの御前で、一六三〇年に私によって説明されているのです。」(C, 108.)。ホッブズのこの主張が正しければ、彼は一六三〇年頃には既に人間学におけるある種の立場を確立しつつあったということができる。また、ホッブズが著者である可能性の高い「第一原理についての小稿」(A Short Tract on First Principles) (EL, 152-167.) という自然哲学論文が、一六三〇年代前半頃に、ニューカスル・サークルから匿名で出されている。『小稿』は三つのセクションからなり、第一セクションは、自然の作用一般に関する抽象的な諸原理とその論理的帰結、第二セクションは、視角のような感覚器官と感覚対象との物理的作用、第三セクションは、想像や情念などといった人間の心理作用について取り扱っている。この論文の内容を非常に大まかに言ってしまえば、物体においても人間においても、それ自体として運動したりしなかったりするようなものはなく、自らの中に作動・非作動の原因をもつものは存在しない、ということである。つまり運動や感覚は外的存在が働きかけたり、働きかけなかったりすることに原因を存する。したがって「幻影」とは「ある外的客体が感覚器官に作用するのをやめた後に我々に現れているところの、その客体の類似物ないしイメージ」(EL, 161.) であり、「実体」としての「幻影」は否定される。「幻影」は単なる「想像」であって、人間の生理的・心理的運動に還元されるのである。この主張は、「光や色はただ脳の中における運動の結果にすぎない」という前述したニューカスル伯への手紙の内容とも一致する。こうしたことへの関心は、当時、ホッブズからすれば「偽りの預言者」――「夢」や「幻影」によって神の声を聞いたと言って自ら預言者と称し、彼の語る「神の言葉」に従うことを人々に要求する者―

―が噴出し、政治問題化したことに原因があったと推測される。宗教的指導者たちは「精霊」（Spirit）や「幽霊」（Ghost）を現実に存在する「実体」だと主張して、民衆に対し「迷信的な恐怖」を煽り、秩序への叛逆を引起す。ホッブズは、「迷信的な恐怖」に突き動かされた宗教による秩序への叛逆を封じ込める、という政治学的課題を果たすために、「迷信」つまり「実体」としての「幻影」を打破する人間学を構築しようとしたのである。

『小稿』はフェルディナント・テニエスの発見以来、その著者はホッブズであると考えれてきたが、最近ではタックが、『小稿』のもつ多くのアリストテレス主義的側面はホッブズの後の諸著作と一致しないとして、異議を申し立てている。[3] しかし『小稿』は、諸原理の設定それに基づく諸帰結の演繹という論証形式をとっており、明らかに幾何学的モデルが意識的に適用されていて、なおかつ『リヴァイアサン』においても、この『小稿』とほぼ同様な人間学的諸前提の設定を見ることができ、著者をホッブズに帰属させる方が理に適っているように思われる。

このように『小稿』がホッブズの書いた物であると仮定するならば、一六三〇年代の初めの頃には、ホッブズは生理的・心理的人間学への関心を持っていたと考えられる。ここで、一六二〇年代の終わり、ホッブズがトゥキュディデスの翻訳において抱えた政治学的な課題を想起されたい。彼はその時、将来の政治指導者の教育という立場から、現実主義的政治認識と責任倫理の必要について示した。だがホッブズはさらなる課題を抱えたのである。一六二八年にアルミニウス主義者（人間は自由意志を持つというカトリック的な主張をする、オランダのプロテスタント神学者アルミニウスを擁護する立場）[4] のリーダー、ウィリアム・ロードがロンドン主教に就任して以来、イングランドでは教会改革が行われ、ピューリタンとの対立が激化していた。そして国王は対立を抑え込むために、『宣言書』を発して『三九箇条』をめぐるカルヴィニストのピューリタンとアルミニウス主義者との間の論争の停止を命じている。[5] 国王の政策に対する反発は高まり、宗教問題が政治問題となって政治状況は激動した。かつヨーロッ

パでは、三十年戦争は終わる気配を見せず、国内の反乱にローマ・カトリック教会や諸外国が介入し、様々な国家間戦争へと拡大していた。このように宗教的対立が政治的対立と絡み合って政治秩序を危うくしているという現実の状況を抑止し、回復させるためには、政治的指導者は、客観的・経験的な知識による政治認識だけではなく、政治秩序全体を安定させるような国家論や道徳論すなわち政治哲学をもつことも必要となる。しかし宗教的「迷信」やレトリックによって対立が煽動されて分裂した社会を一つにまとめるには、単なる一つの主義主張としての政治哲学ではなく、「一足す一は二」であるがごとく、すべての人が納得できるような普遍的な原理を基礎とする政治理論でなければならない。ホッブズはそう考えた。したがって彼は、まず人間の生理的及び心理的な基礎にまで溯って、人間の自然における一般的な諸原理を見出し、それに基づいて国家論を構築しようとしたのである。彼にとって宗教的「迷信」の基礎を成す「幻影」が「実体」であるということは否定されねばならなかった。彼の光学への関心の背後には彼の政治学的課題が存在したのである。そしてこの課題がはじめて達成された政治哲学の書が『法の原理』である。

ホッブズは帰国後、大陸旅行の成果を踏まえ、『哲学原理』の構想に取りかかった。それは、『物体論』(自然学)、『人間論』(人間学)、『市民論』(政治哲学)の三部作からなる哲学体系であった。しかし当時、「船舶税」をめぐる裁判に見られるように反政府の気運が高まり、革命に向かう政治情勢であった。そこでホッブズは、予定を変更して、政治理論に先に取りかかったのである(VC, xc.)。そして彼はまた、フォークランド子爵ルーシャス・ケアリが事実上のリーダーであるグレイト・テュウ・サークルにも参加していた。サークルは、ウィリアム・チリングワース、エドワード・ハイド(後のクラレンドン伯)、シドニー・ゴドルフィン、その他多くの錚々たるメンバーで構成されていた。

グレイト・テュウ・サークルの主たる議題は宗教についてであった。中心メンバーはカルヴィニズムよりアルミニウス主義を好んだが、サークル各人の所属するセクトはカトリックや国教徒と様々であった。またフォークランドやハイドなどは議会における指導的改革者でもあり、サークルは、今や政治問題と化したキリスト教の正説問題やキリスト教の本質についてよく論じた（B, 102-105.）。一六三七年に、国王とロードは、スコットランドにイングランド国教会の祈祷書を強制的に課し、その結果暴動が勃発する。そして、そのままスコットランドでは反イングランド運動が起きていく。[6] ニューカスル伯は自ら兵を集めてスコットランドの反乱者と戦うが、[7] 一六三九年六月、国王は十分な軍隊を編成することができず敗北する。[8] こうした中でホッブズは、キリスト教の本質や宗教論争をどう収めるかといった問題を考えていたと思われる。

実はホッブズは、一六四〇年一月にデヴォンシャー伯爵のお供としてチャールズ一世に謁見している。おそらくこの時、まもなく召集される議会において、王党派の下院議員として活躍して欲しいと言われたのであろう（B, 121.）。彼はその後すぐ、デヴォンシャー伯爵の後押しで、ダービー・ボローの下院議員候補として出馬している（C, 171.）。結局、選挙で敗北を喫して、その後二度と実践家として政治の舞台に立つことはないが、この体験によって、彼はいっそう自らの政治学的課題を知識人として果たそうと認識したに違いない。ホッブズは『法の原理』のなかで、キリスト教の本質に関する問題を「イエスはキリスト（救世主）」であるという、すべての聖職者が同意する命題に還元することで解決しようとし（EL, 116-117.）、宗教論争の収拾方法については、「自己防衛権」の放棄を信約した臣民は主権者の命令（国法）に従わなければならないという社会契約論によって説示したのである（EL, 149-150.）。『法の原理』はニューカスル伯に献呈され、その日付は一六四〇年五月九日となっているが、おそらく書きあがったと同時に手稿が回覧され、春には読まれていたと思われる（B, 122.）。こうしてみると『法の

原理』の執筆時期はほぼ「短期議会」の召集の時期と重なる。したがって、臣民は主権者の命令（国法）に服従しなければならないというそこでの主張は、国王が課した「船舶税」や「騎士強制金」なども正当化することになり、国王の対スコットランドの戦費調達を拒否した議会多数派を批判するものと受けとめられるのは必至であった。

その頃国王は、あくまでもスコットランドのイングランド国教会化にこだわり、むしろ戦争によって事態の解決を目指していた。しかし八月にスコットランド軍が国王軍を破りイングランド北部を占領する。敗北したチャールズ一世は賠償金支払いのため「長期議会」を召集せざるを得なくなった。一一月三日に「長期議会」が始まり、ストラフォード伯の弾劾が始まる。[9] 同時に、ジョン・ピムらの議会改革派は、国王支持の書物の調査を行って、絶対王政擁護者リストを作り、攻撃の準備を始めた。ホッブズは『法の原理』がその対象とされるのを恐れた。「私が去った理由は、国王大権を助長するような言説が議会で調査され始めるのを見たからです。」（C, 115.）。国王の右腕ストラフォード伯やカンタベリー大主教ロードすら逮捕・拘禁されている状況である。サークルの仲間や友人たちが、いくら『法の原理』を支持してくれたとしても、民衆の国教会攻撃の示威行動は激しさを増し、ピムはこのような大衆からの圧力を利用して、議会での勢力を拡大しており、[10] ホッブズの安全を保障するものはおそらく何もなかった。こうして彼は身の危険を感じ、フランスに亡命するのである。

注

(1) *Leviathan with selected variants from the Latin edition of 1668*, ed. Edwin Curley, Hackett, 1994, p.xlviii.

(2) *Ibid.*, p.l.

(3) Richard Tuck, "Hobbes and Descartes," in *Perspectives on Thomas Hobbes*, ed. G. A. J. Rogers and Alan Ryan, Oxford, 1988, pp.17-18.

(4) 小泉、前掲書、一八九ページ。
(5) 岸田紀、第二章「絶対王政からピューリタン革命へ」、村岡健次・川北稔編著『イギリス近代史』、ミネルヴァ書房、一九八六年、三五ページ。
(6) 小泉、前掲書、一八八ページ。
(7) *Leviathan*, ed. Curley, p.l.
(8) 小泉、前掲書、一八九ページ。
(9) 今井宏、第六章「ピューリタン革命」、今井宏編『世界歴史大系イギリス史2近世』、一九二―一九三ページ。
(10) 今井、同書、一九三ページ。

第二章　フランス亡命と名声の確立（一六四〇―一六五一）

第一節　デカルトとの対決

ホッブズは、イングランドを発つわずか三日前に、デヴォンシャー伯爵にそのことを告げた（B, 162.）。彼は取るものもとりあえず、祖国から逃げ去った。彼のこの行為は、後に『リヴァイアサン』によって正当化される。すなわち、国家への「服従の目的は保護」であるから、「ある人が身体の自由を信用に基づいて与えられなかったならば、彼は信約によって臣従すべく拘束されるものとは理解されえない。したがって、できるなら、どんな手段に

よって逃亡してもよいのである。」(L, 153-154.)。しかしイングランド脱出後どうするのか、彼はどのように考えていたのであろうか。

一六三七年、ホッブズは『修辞学の技術』(The Art of Rhetoric) を出版した。これはアリストテレスの『修辞学』をラテン語に翻訳した抜粋である。執筆時期はおそらく一六三五年頃で[1]、デヴォンシャー伯爵のラテン語練習のために書かれたものである。オウブリィによれば、ホッブズは「アリストテレスはこれまで存在したなかで最悪の教師である」が「『修辞学』と『動物誌』はたぐいまれなるものであった」と述べていたという (ABL, 158.)。シュトラウスは『法の原理』はアリストテレスの『修辞学』にかなり依拠していると主張している[2]。ホッブズにおけるアリストテレスの位置づけという問題はきわめて難しい。一六二〇年代には既に、彼はスコラ哲学と絶縁しているが (V, xiii.)、同時に哲学におけるアリストテレスをも放棄したというわけではなく、後の『リヴァイアサン』におけるアリストテレス哲学批判も、キリスト教へのギリシア思想の混入を批判しているのであって、アリストテレスの思想を絶縁してしまったとは言い切れない。おそらくホッブズは、一六三〇年に幾何学の論証方法の力強さに心を奪われて以来、独自の学問上の方法論を確立しつつあったので、この『修辞学の技術』の出版によって、彼の人文主義的研究にひと区切りつけたかったのだろう。そしてこの年、ルネ・デカルトの『方法序説』が出版される。ホッブズはこの本を、三度目の大陸旅行中に知り合ったイギリス人、ケネルム・ディグビィによって、パリから直ちに送られている (C, 51.)。したがって出版してすぐ、目を通しているはずである。ホッブズは『方法序説』を熱心に読み、フランスへ亡命する直前、一六四〇年一一月五日、メルセンヌに五六ページにも及ぶ『方法序説』批判の手紙を送っている[3]。彼はデカルトに触発されて、自らの哲学体系を完成させようと強く思うに至り、危険なイングランドを逃れ、学問に没頭するために、メルセンヌ・サークルのもとで研究生活を送ろうと考えたのではないだ

ろうか（V, xv.）。

ホッブズはメルセンヌを介してデカルトとの書簡のやり取りを始める。メルセンヌは、ホッブズのデカルト批判における鋭い洞察力に心を惹かれたからか、同じフランス人である著名な哲学者よりも、まだ無名であった一介のイギリス人に対し、熱心に肩入れをしていくのである。こうしてホッブズはデカルトと対峙させられることによって名を知られるようになる。メルセンヌから一流の知識人になるチャンスを与えられたのである。しかしホッブズとデカルトとの関係は、当初から友好的なものとは言い難かった。デカルトはメルセンヌにこう言う。「手紙が書かれた様式から、その著者が賢く学識があるように拝見しますが、彼は、独自のものとして進めるどの主張においても、真理からそれているように見えるという事実に、私は非常に驚きました。」（C, 57.）。さすればホッブズはメルセンヌにこう返す。「私は彼〔デカルト〕の判断力をきわめて高く賞賛しています。私はただ、彼が私の書いたことを、もう少し注意深く読んでくれたらと願うばかりです。そして、もしあなたがそうするように彼に言ってくだされば、私は誰の批判も受けることはないでしょう。」（C, 79.）。そして彼らの関係は次第に険悪になっていく。一六四一年二月二二日のデカルトからメルセンヌへの手紙において彼は次のように言う。「もし彼〔ホッブズ〕の性格が私の疑う通りのものだとしたら、私たちは敵になることなしに話し合うことはほとんどできません。ですからそれをそこに放っておくことが彼と私の二人にとってより良いのです。また私はあなたに、あなたが知っていて、しかし出版されていない私の諸意見については、それらをできるだけ彼に伝えないで欲しいのです。というのは、もし私があまり間違っていないとしたら、彼は私を犠牲にして、ずるい手段によって、評判を得ようとするでしょうから。」（C, 100.）。一方、ホッブズは三月二〇日の手紙でメルセンヌに答える。「しかしこのけんかは、あなた自身が知っているように、彼によって始められたのです。」（C, 107.）。けんかの原因は何だったのだろうか。デカル

トは、ホッブズの決して歩み寄ることのない批判はもとより、ホッブズが彼自身の概念である「内的な霊」(internal spirit) とデカルトの概念である「微妙な質量」(subtle matter) とを同じものであると言ったことに憤慨するのである。彼は語気を荒げて言う。「もしそれが同じものであるなら、私がそれについて最初に書いたとすれば、彼がそれを私から借りたのだと言いうるでしょう。」(C, 97.)。デカルトは、自らの発見である概念について、ホッブズも同様に気づいていたと安易に言われたことに腹を立てたのである。さらに、それを認めてしまうと、ホッブズの自然哲学から推論される彼の異端的宗教論と同一視されるおそれがあるとデカルトには思えたのかもしれない。デカルトのこの発言から、議論は自然学における原理の発見はどちらが先かに移って行く。ホッブズはメルセンヌに訴える。「デカルト氏が今拒絶している、光、音およびすべての幻影あるいは思考の性質と生成の教説は、一六三〇年に、きわめて優秀な兄弟であるニューカスル伯爵ウィリアムと（私たち共通の友人である）チャールズ・キャヴェンディッシュ卿の御前で、私によって説明されたのです。」(C, 108.)。ホッブズのこの発言には自信が見られる。なぜなら、もしメルセンヌが望むなら、彼はその真否を友人であるキャヴェンディッシュ卿に確認することができるからである。ホッブズは元々、自分の方が先に発見したということを主張したくて、概念の類似性について述べたわけではなく、おそらく単に、デカルトとの共通の着眼点に喜び、それを示したのではないだろうか。しかし共通の着眼点をもっていたということは、裏を返せばホッブズも既に発見していたということを含意してしまう。タックによれば、ホッブズの哲学は「デカルトの批判的読解によって非常に多大な影響を受けて」いて、『法の原理』においてさえ「デカルトに対する敵対心の多くの痕跡がみられる[(4)]」という。つまり、ホッブズの自然哲学は、一六三七年に『方法序説』に出会って以降、発展したというのである。しかし筆者の目には、ホッブズの自然哲学的側面は、彼の政治学的課題を契機として、未完成ながらも、一六三〇年代に既に形成されつつあったように見える。

つまり上記のホッブズの発言を是認する立場である。いずれにせよ、両者の見解の相違は、一六四一年に出版されるデカルトの『省察』に付加された反論と答弁において、公的に明らかにされる。

『省察』の第三反論がホッブズの手によるものである。彼らの相違を単純化して言えば、デカルトは「精神的二元論者」で、ホッブズは「唯物論的一元論者」（B, 164.）であるということである。デカルトの有名な命題「私は思惟する。それゆえ私は存在する」（Cogito, ergo sum）は、懐疑を突き詰めていくと、疑う人の「存在」を前提しているということに行きつき、それがそれ以上疑うことのできない真理である、という主張である。このことからデカルトは思考が人間の本質であるという見解にいたる。彼は「存在」（物体）から「思考」（精神）を分離する。つまり「存在」と「本質」とを区別する二元論をとるのである。[5] デカルトにとって「精神」は非物体的「実体」である。[6] しかしホッブズにとって「精神」とは「有機体の若干の部分における運動以外の何ものでもない。[7]」「精神」は「物体」から切り離されては考えられないのである。それはなぜか。ホッブズは、人間は「何であれ働きをそれの主体なしに概念しえ」ない、つまり「思惟するもの」は無ではないので、「思惟」を「思惟するもの」なしには概念できないと述べる。そうであるから「思惟するもの」は物体的であると結論する。[8] デカルトはこの演繹を論理的でないと斥ける。だが、ここで注意しなければならないのは、ホッブズは「思惟」という用語をデカルトとは異なった内容で用いていることである。デカルトは「思惟」を「知解する、意志する、想像する、感覚する」と言い換えうるとしている。[9] 他方、ホッブズにとってこれらはすべて全く異なる状態である。ホッブズによれば、「思惟」とは、心の中に浮かんだ「形と色とから構成された観念、言うなら映像」である。[10]「想像」や「映像」は「身体的器官の運動に依拠する[11]」、つまり「感覚」のなかで起こった諸運動の働きなのである。したがって、それらは人間の身体すなわち「物体」の存在を前提としている。それゆえ「思惟」つまり「映像」が「思惟するもの」なしに概

念できないという時、その「思惟するもの」とは「物体（身体）」を意味するのである。したがって、ホッブズは非物体的な「実体」を認めない。デカルトもホッブズも「実体」は存在するものと考えるが、デカルトは「実体」には物体的「実体」と非物体的「実体」があると捉え[12]、ホッブズは「実体」が存在するものであるならば、物体的でなければならないとし、それは「偶性と変化とに従属する物質」[13]であると捉えている。彼は「存在」を欠いた「本質」とは我々の虚構に過ぎないと結論づけている[14]。ホッブズの非物体的「実体」の否定は『リヴァイアサン』において継承されている（L, 77.）。前述したように、彼は、非物体的「実体」や存在のない「本質」という考えが、容易に、見えない力や「幽霊」を恐れる宗教的「迷信」に転化し、無知な民衆を煽動するレトリックとして用いられ、政治秩序への叛逆を生み出す危険性があるということを見ていた。だからこそ、「存在」と「本質」を分離する二元論を取るわけにはいかなかったのである。ホッブズとデカルトは、メルセンヌの努力によって、一六四八年、パリのニューカスル侯の館で、ようやく直接、顔を会わせる（C, 827.）。しかし、彼らはそれ以降、二度と会うことはなかった（B, 171.）。

ホッブズとデカルト――近代の思想的創始者たる二人の対立、それは一口に近代（モダン）といっても、互いに対立する思想的方向を含んでいたということを意味する。つまり近代はきわめて多様な特性と思想の深みをもっているのである。ポスト・モダンを語る現在になっても、我々は近代の思考や理念を完全に把握し、乗り越えているわけではない。近代とはいったい何であるのか。我々はまず、それを掴まなければならない。

注

(1) Leo Strauss, *The Political Philosophy of Hobbes*, Chicago, 1952, p.41. 添谷育志・谷喬夫・飯島昇蔵訳、『ホッブズの政治学』、み

すず書房、一九九〇年、六二ページ。

(2) *Ibid*., p.35. 邦訳、四六ページ。

(3) Tuck, "Hobbes and Descartes," p.14.

(4) *Ibid*., p.28.

(5) ルネ・デカルト、所雄章訳「省察および反論と答弁」、『デカルト著作集』第二巻、白水社、一九七三年、二三五ページ。

(6) 同書、二一三ページ。

(7) 同書、二一六ページ。

(8) 同書、二一〇ページ。

(9) 同書、二一三ページ。

(10) 同書、二一七ページ。

(11) 同書、二一六ページ。

(12) 同書、二一三ページ。

(13) 同書、二二四―二二五ページ。

(14) 同書、二三五ページ。

第二節　『市民論』と自由意志論争

一六四一年五月一二日、革命の最初の犠牲者として、ストラフォード伯が処刑された[1]。国教会を廃止する「根こ

そぎ法案」が出され、七月には、イングランドのすべての教会裁判権は、九人の平信徒の委員によって執行されるという新しい条項が付加された。ホッブズは、この出来事について、デヴォンシャー伯爵への手紙のなかで次のように述べている。「聖職者たちや教会の職員たちによってなされた多くの悪弊は、否定されえないし、許されることもできません。しかしそれらが国教会制度自体から生じたのかは、それほど明らかに証明されていません。…私は、聖職者たちは統治するよりもむしろ牧師をするべきであり、少なくともすべての教会統治は国家に依拠し、まさに国教会においてこそ統一がありうる、王国（the Kingdom）の権威に依拠する、という意見を持っています。」（C, 120-121.）。この発言は、ホッブズがアングリカン体制を支持していることの一つの証明となるだろう。そして彼によれば、内乱の原因は「霊的権力」と「政治的権力」との間の論争にある。ホッブズはこの視点を『市民論』においても『リヴァイアサン』においても一貫して保持していく。イングランドでは、国王は反革命の画策を続けていたが、議会との対立は激しさを増し、ロンドンにおける民衆のデモや集会の盛り上がりは頂点に達していた[2]。ホッブズは祖国のこうした状況を受け、一六四二年四月、パリで『市民論』を匿名で出版した。彼は、イングランドの内乱を終わらせるために、知識人としての使命を果たそうと願ったのである。それゆえ、彼の哲学体系の書である『哲学原理』において第三セクションに予定されていた『市民論』を、一番最初に書くということに変更したのである。だが『市民論』はラテン語で書かれている。彼にとって『市民論』の内容は、明らかに祖国の戦争状態を念頭においたものだが、それは、どの国家にも通用する普遍的なものを備えていると自負していたので、ヨーロッパの他の国の人々にも読んでもらいたいという意図があったのである。しかし第一版の部数は非常に少なく、せいぜい一〇〇部ほどであり、ホッブズがこの時想定していた読者は友人たちであった。出版における資金調達は、王妃アンリエッタ・マリアとも入魂であるカトリックの亡命イギリス人、ディグビーが行った（B, 178.）。ホッブ

ズは、この『市民論』によって、「私の名が諸国民に広く知られ」るようになったと自伝において述べている（VC, xc.）。第一版の部数が少なかったので、ホッブズの評判は口コミで広がり、やがて第二版の出版を求められるようになった。そこで、メルセンヌ・サークルの仲間であり、ホッブズのきわめて親しい友人となるフランス知識人、サミュエル・ソルビエール（Samuel Sorbière）の努力によって、一六四七年一月、オランダで、『市民論』第二版が公刊されるのである（B, 205.）。大量の発行部数によって、ホッブズの名は大陸中に知られるようになり、彼はヨーロッパにおいて名声を獲得した。

ホッブズは一六四二年に『市民論』を出版すると同時に、メルセンヌ・サークルに参加していた亡命イギリス人で、カトリック神父であるトマス・ホワイトが同じ年に出版した『世界論』（*De Mundo Dialogi Tres*）について批評を書いている。ホワイトはこの著書において、ガリレオの『天文対話』をモデルとして、近代自然学とアリストテレス的目的論とを一致させようとした。ホワイトは、神の天地創造の目的は人間であり、神の世界創造の原因は人間が「自由意志」をもつことにあると考える。そして「世界は人間のために作られた道具」と結論づける。これに対し、ホッブズは自由な意志を否定し、意志を人間だけでなく動物にも認めるので、彼にとって意志を有することは、神の世界構築の原因となるような価値をもちえない。さらに彼は、そもそもすべての事物の究極的原因である神の意志に原因などありえないと主張し、ホワイトの目的論的世界観を辛辣に批判するのである[3]。ホッブズは五〇〇ページにも及ぶ草稿をメルセンヌに渡した（B, 182.）。このホワイト批判で明らかにされたホッブズの「自由意志」否定の主張が、三年後のブラムホールとの自由意志論争につながったと考えられる。

さて、この頃イングランドでは、一六四二年七月初め、議会は治安委員会を設置し、国王が開戦した旨を宣言した[4]。デヴォンシャー伯爵は、六月に国王と一緒にヨークにいたことから、議会の欠席について弾劾され、他の八名

の貴族と共に下院から追放されてしまう。次いで、ロンドン塔への投獄の命令が議会で出されたため、大陸に亡命した（C, 816.）。そして八月、国王はノッティンガムに国王軍の集結を命じ、内乱が勃発する[5]。翌年、ニューカスル伯は北部の国王軍司令官として活躍し、侯爵に叙せられるが、一六四四年六月のマームストン・ムーアの戦いで敗退し、パリへ亡命することとなる（C, 814.）。一方、ノッティンガムシャー及びリンカンシャーの国王軍最高司令官として、デヴォンシャー伯爵の弟チャールズも果敢に戦っていた。彼は、生来、野生的かつ向こう見ずな性格で、一六三八年、パリ滞在中、ホッブズからパリでの乱暴な行為を咎める手紙を送られているほどであったが（C, 52.）、戦地においては、それは危険を顧みず勇敢に戦うという行動へ表われ、七月、二三歳で戦死する（C, 806.）。そして一六四五年一月にウィリアム・ロードが処刑され、アングリカン体制のシンボルが消された[6]。こうしてピューリタンの時代がやってくるのである。今や、デヴォンシャー伯爵やニューカスル侯爵をはじめ、多くの王党派の人々がパリへ亡命し、本人たちの意図せざる形で、ホッブズと再会する。

一六四五年八月、ホッブズはニューカスル侯のパリの館で、アルミニウス派のイングランド国教会の主教ジョン・ブラムホールと「自由意志」について討論を行った。ブラムホールは、ストラフォードとロード大主教の同盟者であり、ロードの教会政策をアイルランドで忠実に遂行しようとし、ロード弾劾の後、イングランドを逃れた。

ここでの論題は、人間が意志するのは神の意志によるのか、人間の選択によるのか、ということである。ホッブズは人間の「自由意志」を否定し、ブラムホールは肯定した。一般に、「自由意志」論はローマ・カトリックのものであるが、アルミニウス主義者は、プロテスタントの立場にたってそれを主張する。したがってピューリタンからは疑似カトリックとみなされ、批判された[7]。他方、「自由意志」の否定は、「神の予定」を承認するという意味で、厳格なカルヴィニズムとみなされうるが、ホッブズの自由と必然についての見解は、カルヴィニズムに一般化しえ

ない独自性を持っている。ホッブズは自らの見解を要約してこう述べている。「人間には一瞬の間につぎにいかなる意志を抱くかを選択する能力はない。偶然は何ものも生み出さない。あらゆる出来事や行為には必然的原因がある。すべてのものごとを必然的たらしめるものは神の意志である。」（EW, V, to the Reader.）。ホッブズは、その自然学において、あらゆる事物は、外的な原因によって動かされれば、永遠に運動し、運動を止められれば、静止し続けると考える。「運動の始まりは運動である。」（C, 91.）。同様に、人間の意志も外的原因によって引起される。人間はある行為を行おうとする場合、行為の結果についての善悪を想像する。この善悪の想像が、良い帰結つまり「希望」と、悪い帰結つまり「恐怖」、という欲求を交互的に引起していく。この過程が「熟慮」であり、「熟慮」の過程における最後の欲求が意志である（EW, IV, 273.）。要するに、人間は心の中で、行為を行うか否かの欲求の交互的生起という運動を行っているのである。そしてこの運動の外的原因が、事物の第一原因である神の意志である。しかし人間は、神の意志で始まったこの欲求の交互的生起という運動を、自らの力で終わらせることはできない。欲求を「希望」で終わらせたり、「恐怖」で終わらせたりすることはできないのである。例えば、人間は空腹時、何かを食べるかどうかという行為を制御することはできるが、空腹感を感じるかどうかをコントロールすることはできない。欲求は人間のコントロール下にはないのである。そして「意志とは欲求であるから、人は誰も自らの意志を決定することはできないのである。」（EW, V, 34.）。「意志することは、神のわざであり、人が選びうることではない。」（EW, V, 9.）。したがって、人間の意志は「必然的」なものなのである。しかしながら、この「必然的」な意志と「自発的」（voluntary）な行為とは矛盾しない。なぜなら、「自由とは行為に対する一切の障害物の欠如のこと」であるから、心の中で抱かれた意志が行為となって現れる際に、それを妨げる「障害物」がなければ、その人は意志が志向する事柄を行う「自由」をもっているからである。（EW, IV, 273.）。つまり、空腹感を抱いた

人間が何かを食べるということを意志した場合に、その空腹は所与の欲求であるが、それに従って食べるという行為を行ったとき、それは自らの行為であり、「自発的」である。そして食べることを何かに妨げられなければ、彼は行為において「自由」であったといえるのである。

この「意志は必然である」というホッブズの意志論は『リヴァイアサン』において、そのまま再出する。祖国の内乱状況を引き起した根本問題を、「霊的権力」と「政治的権力」との間の論争にあると捉えたホッブズは、「自由意志」論との対決のなかで、独自の意志論を確立し、そこにイングランドの平和回復の鍵を見出した。それこそが、各人の「必然である」意志と意志との間の同意である社会契約論の構築である。ホッブズにとって「必然である」意志によって結ばれた「契約」は破棄されえない。なぜなら、意志は究極的には神の意志に結びついているからである。各人は一旦、自らの意志によって「契約」という「行為」を行ったならば、「彼は彼自身の意志によるその行為を無効にしてはならない」(L, 93.) という義務を負うことになる。そしてそれは「神に対する義務」となる。ホッブズは、支配・被支配関係を支える義務の根拠として同意を設定し、それに基づく社会契約論を、政治的主権者が同時に宗教的な事柄における統治者であるアングリカン体制的国家論に組み込むことで、「政治的権力」と「霊的権力」という「ワシの双頭を再び一つにする」[8]ことを理論的に成しえたのである。つまり、ホッブズの意志論が展開する『リヴァイアサン』第一部「人間論」は、第二部社会契約論の論理的前提であり、かつその社会契約論は、教会統治における政治的主権者の権利の確立を目的とする第三部「キリスト教のコモンウェルス」の論理的基礎なのである。したがって、ホッブズの『リヴァイアサン』執筆の主眼は、これまで日本のホッブズ研究が重視してきた前半部分よりもむしろ後半部分にあるとさえいえよう。

ところで、ブラムホールが唱えた「自由意志」論に基づく、もう一つの系譜の契約論が存在する。たとえばルソ

ーの社会契約論がそれである。ルソーはホッブズの政治学的課題を継承し、それを「自由意志」論に基づいて再構成した。そしてルソーは、「自由意志」論をもっと徹底化させ、政治的権力への宗教的権力の包摂という課題を、「市民宗教」という形に結晶化させることで果たそうとしたのである。

ニューカスル侯は、彼らの討論の内容を書面に落とすよう求めた。ホッブズとブラムホールは出版しないという条件で応じ[9]、両者はそれぞれこの文書を保持することになった。しかし、一六五四年にホッブズ信奉者によって、両者の意志に反し、無断で出版されてしまうという事件が起こる。これをきっかけとしてホッブズは再びブラムホールと公的に対決せざるをえなくなるのである（B, 267.）。

注

(1) 今井、前掲書、一九三ページ。
(2) 同書、一九六ページ。
(3) 高野清弘『トマス・ホッブズの政治思想』、御茶の水書房、一九九〇年、一四〇―一四二ページ。
(4) 今井、前掲書、一九七ページ。
(5) 同書、一九七ページ。
(6) 岸田、前掲書、三八ページ。
(7) 小泉、前掲書、一八九ページ。
(8) ルソー、桑原武夫・前川貞次郎訳『社会契約論』、岩波文庫、一九五四年、一八三ページ。
(9) *Leviathan*, ed. Curley, p.li.

第三節　革命と『リヴァイアサン』

一六四六年六月一四日、ネイズビの戦いで議会軍が勝利し、チャールズ一世はスコットランド軍に身を投じ、その後、議会軍に身柄を拘束される。七月に国王軍は降伏して、第一次内乱は終結した[1]。敗れたチャールズ皇太子は多くの王党派と共にフランスに亡命し、サン・ジェルマンに亡命宮廷を開いた。ホッブズはその頃、『物体論』の執筆に集中するため、友人であるトマス・ド・マルテル（Thomas de Martel）の誘いを受けて、彼の地所であるモントーバンに移り住む手筈を既に整えていた。しかしホッブズは、おそらくかつて教育係であったニューカスル侯の関係を通して、サン・ジェルマンの皇太子の数学教師として推薦されたので、それを引き受けることにし、モントーバン行きを断念した（V, xv.）。こうしてホッブズは、サン・ジェルマンで約二年ほど過ごすことになる（B, 207.）。彼は皇太子の教師という仕事によって、執筆に没頭することができなくなり、仕上げるのに時間がかかったと述べている。だが、その執筆の対象は、予定していた『物体論』ではなく、新たな政治哲学の書『リヴァイアサン』に変更されていた。彼はこの変更をこう説明している。「私は、こんなにも多くの、こんなにも醜い犯罪が、神の命令とされるのに耐えることができませんでした。私はまず初めに神の法を釈き明かすことを決意したのです。」（VC, xcii.）。ピューリタン革命は、国王と議会との単なる政治的対立によって起こったものではなく、政治的対立と宗教的心情が絡みつき、長老派、独立派、レヴェラーズといった各宗教セクトの神に対する宗教的良心や宗教的使命に突き動かされた現世改革の側面が強い。議会や軍隊における内乱の中心的指導者たちは、腐敗した国教会体制を打破し、国王の圧政に苦しむ人々を救うことが「神の命令」に従う「義務」であると民衆や兵士たちに説いた。実際、ピューリタン革命が「革命」たりえた理由は、後のフランス革命やロシア革命と同様、民衆運動の

高揚を背景とするが、フランス革命やロシア革命と違って、民衆の蜂起は、農村の荒廃や飢饉を直接的契機とするのではなく、政治的エリートやとりわけ軍隊の中心的人物たちによる宗教的教説によって煽動された、宗教的熱狂を起動力としていたのである。[2] それはなかんずく一六四九年一月のチャールズ一世の処刑とともにさらに高揚し、「神の王国」の到来を待ち望む「千年王国」思想として現れる。つまり「第五王国派」と呼ばれるセクトに見られるように、国王の処刑によって世界史上の四帝国の最後のものであるローマ帝国が滅亡し、「神の王国」たる第五王国の到来は間近いと考え、しかも自らは神によって選ばれた聖者であり、聖者は「神の王国」の到来を準備するためには、たとえ暴力を用いてでも現世の制度を打倒しなければならない、と唱えるものである。[3] このような宗教的イデオロギーが軍隊内や民衆の間で力をもっていたのである。こうした中で、ホッブズは、革命の指導者たちが、彼らの「良心」や「信仰」に基づいて、「神の言葉」すなわち「聖書」を自由に解釈し、国家権力への叛逆の正当化理由を「神の命令」に従う「義務」としているのを見て、「神の法」とは何であり、それを解釈するのは誰か、そして服従すべき相手は誰であり、なぜそうしなければならないのか、これらのことを明らかにしなければならないと思ったのである。前節のデヴォンシャー伯爵への手紙において見たように、ホッブズの政治学的観点からすれば、「神の法」の解釈について服従すべき相手は国教会の首長である政治的主権者である。したがって、ホッブズの国家論はアングリカン体制をとっていると予測が立てられるのである。

ところで、ホッブズの政治理論がアングリカン体制を採用していたということとは別に、ホッブズ自身がアングリカンの立場であった可能性を示す一つのエピソードがある。彼は一六四七年八月半ばより、命が危ぶまれるほどの重病にかかり、数ヶ月もの間ずっと床に臥せていた（C, 164.）。見舞いに来たメルセンヌは、友の死を目前にして、彼にカトリックに改宗するよう勧めた。しかしホッブズはそれを断った。数日後、今度は後にダーラムの主教

となるイングランド国教会の聖職者ジョン・コージンが、ホッブズと共に神に祈りましょうとやってきた。ホッブズは彼に感謝の気持ちを伝えた後、こう言った。「そうしましょう。もしあなたが国教会の儀式にしたがって祈りを先導して下さるならば。」この事実は彼が国教会の教説を尊重していることの重要な証拠である、と自伝で自ら述べている（V, xvi.）。

しかし、なぜホッブズは、一六四七年に既に『市民論』の第二版を出版していたにもかかわらず、さらに『リヴァイアサン』を書いたのであろうか。そこで、ホッブズの亡命時代の出版状況を見てみることにしよう。ホッブズは一六四二年四月、革命へと向かうイングランドの状況に対して『市民論』第一版（ラテン語）をパリで一〇〇冊ほど出版した。イングランドで内乱が起きたのは一六四二年八月。四年後の一六四六年六月に第一次内乱は終結した。翌年、『市民論』第二版（ラテン語）をオランダ、アムステルダムにおいて大量部数でもって公刊するが、売行きが好調で八月には完売、しかも何百もの注文が殺到し、印刷会社はさらに二回増版している（B, 205.）。次いで一六四八年四月に、第二次内乱が勃発し、四ヶ月後に終結するが、それは一六四九年一月の国王処刑という結果をともなった。同じ年の七月にソルビエール訳による『市民論』フランス語版がアムステルダムで出版される。これはホッブズの承認済みである。さらに一六五〇年に今度はロンドンで、ホッブズのフランス亡命の原因となった手稿『法の原理』（これは英語で書かれている）が、『人間の本性』と『政治体について』との二つに分離されて、ホッブズの許可なく匿名で、それぞれ二月と五月に出版される。[4] さらにまた『リヴァイアサン』が出版されるおよそ一ヶ月前の一六五一年三月、同じくロンドンで『市民論』英語版が出版される。[5] これについては翻訳がホッブズ自身なのか他の者によってなされたのか意見が分かれている。そして最後に、一六五一年四月後半あるいは五月初旬、母国語で書かれた『リヴァイアサン』が、ロンドンで出版されるのである（B, 213.）。このときホッブズ自身

はまだパリにいた。

こうしてみると、ラテン語で書かれた『市民論』第二版を出版してから、特に国王処刑後、ホッブズの政治的著作が様々な形で毎年公刊されていることがわかる。とりわけイングランドでは、ホッブズが不在にもかかわらず、彼の本が出版され、いかに彼の著書が求められていたかが理解されよう。したがって、ホッブズが『リヴァイアサン』を書き始めたのは、おそらく、イングランド人だけでなくヨーロッパ中を震撼させた事件である国王チャールズ一世の処刑（あるいは、それに向かうイングランドの政治状況）を直接的契機としていると考えられる。それはちょうど、彼の住むフランスにおいても「フロンドの乱」（一六四八年八月～一六五三年七月）と呼ばれる内乱が勃発していた時期でもあった。こうした状況の中で、ホッブズは内乱の終結と再発の防止という政治的課題をこれまで以上に痛切に感じ、しかも祖国の人々もまた、彼の政治哲学の書を求めていることを知ったのである。利害感情による争いと違い、宗教戦争は妥協点を知らず、「神の命令」という大義名分の下に、悲惨で凄惨な結末を迎える。その行きついた先が国王の処刑であった。平和を回復するためには、それぞれ異なった宗教的心情によって突き動かされ、「神に対する義務」を果たすために殺し合っている人々に対し、戦争をやめさせ、彼らを政治的に統合することが必要である。しかし、「神の命令」に従っている人々を納得させるには、「神の命令」に基づいて、つまり、「神に対する義務」として、国家権力への非抵抗を内面的に義務づける政治理論でなければならない。したがってホッブズは、『市民論』以上に、宗教を政治に包摂する論理を徹底化し、革命的な宗教的心情を原理的に封じ込める道徳哲学（Ethica）（V, xix.）たる国家論を構築しなければならないと考えた。しかもそれを母国語で書くことが必要であると認識したのである。

『リヴァイアサン』の特徴は、徹底的に責任倫理を追求する政治哲学・道徳哲学の書であるということである。

これはホッブズ自身の政治的な志向の表われとも言えるだろう。ホッブズは平和の回復ないし維持のために、主権者や臣民がどうあるべきかを、抽象的に解き明かしているのである。だから、この著書の中で、王党派支持あるいは革命政府反対といった個人的な心情が語られることはない。ところで筆者は第一章第二節で、ホッブズが君主権力との距離の近い政治的な貴族キャヴェンディッシュ家に属し、将来の政治的指導者を教育する立場から政治に関心を持ったと述べた。しかしながら、このキャヴェンディッシュ家を代表する二人の貴族は、革命期に対照的な行動をとった。ホッブズの主人であるデヴォンシャー伯爵は、一六四二年にパリに亡命してきたが、イングランドにおける伯爵家の土地や財産を守るため、一六四五年にイングランドに帰国し、翌年賠償金を払って議会側と妥協した。その後バッキンガムシャーへ隠遁するが、しかし完全に安定的な生活を確保できたわけではなかった。彼は帰国後もホッブズと連絡を取り続けたが、その書簡は議会派の高官によって検閲され、一六五五年の夏には逮捕されるという危険な目にもあっている（しかしすぐに釈放された）（C, 816.）。一方、ニューカスル侯爵は、王党派の立場を一貫して保ち、一六六〇年、王政復古するまでイングランドに帰らなかった。だが大陸亡命中、彼のイングランドの土地や財産は没収されたので、彼は借金で暮らさざるをえず、金銭的に困窮した状態であった（C, 814.）。そしてホッブズは、今や家庭教師としてではなく一知識人として、それもヨーロッパ中に知られた著名な哲学者として、理論的に独自のスタンスを明示したのである。それは、一方で、政治の目的は人民の血を流さないことであって、各人の国家への「服従の目的は保護」であるから、「身体の自由を信用に基づいて与えられなかったりするならば…どんな手段によって逃亡してもいい」（L, 154.）という自己保存の原理であり、しかし他方で、一旦「意志」によって政治的主権者に服従する「契約」を結んだならば、国王であろうが革命政権であろうがイデオロギーは問わず、臣民は事実上の権力に服従しなければならない、というものである。この教説に基づくならば、自己保

存のために事実上の権力に恭順したデヴォンシャー伯爵も、自己保存が確証できないため亡命を続けたニューカスル侯爵も、どちらの行為も正当化されうるだろう。このきわめて政治的なホッブズの立場は、彼自身の現実生活の面においても現れている。それは『市民論』第二版に付けるはずであったホッブズの肖像画についての事件に見られる。

『市民論』第二版のオランダでの出版に非常に努力したソルビエールは、ホッブズに対する好意と讃辞を表す目的から、『市民論』に付す肖像画と詩を手配し、そこにホッブズの肩書きとして「皇太子殿下の学問的教師」と題したのである。しかしホッブズはこれを喜ぶどころか反対に動揺し、既に印刷されているものから全て取り除くようにソルビエールに要請するのである（C, 157.）。それはなぜか。「皇太子殿下の学問的教師」という肩書きは、ソルビエールが思ったように、一般には名誉あるものと考えられよう。しかしながら、国王軍と議会軍が戦争しているこの時期に、政治理論の書の著者が「皇太子殿下の学問的教師」と題されることは、それ自体で国王側に与することになってしまう。ホッブズはそれを恐れた。ホッブズは、国王であれ革命政権であれ、事実上の権力である「政治的主権者」に対し臣民は服従する義務をもつと主張する。だから『市民論』においても『リヴァイアサン』においても、彼は国王側あるいはクロムウェル政権側を支持するというような特定の党派的な心情を示していないのである。ホッブズは次のように言う。「私は権力をもつ人々についてではなく、権力の座について（抽象的に）語っているのです。」（L, 3.）。そしてホッブズがソルビエールへの手紙のなかで訴えているように、この肩書きは、実際的な面でも、事実上革命政権が支配するイングランドへのホッブズの帰国を妨げる可能性がある（C, 157-158.）。ホッブズは、確かにイングランドへの帰国を願っていた。一六四八年五月二日付のデヴォンシャー伯爵宛の手紙のなかで、伯爵から帰国する気はないかと尋ねられ、安全保障が非常に少ない間は帰らないが、もちろんそうしたい

と伝えている（C, 170.）。一六四九年九月一二日、ガッサンディに対しても、いつ帰国してもいいように健康を管理していると述べている（C, 179.）。しかしながら、ホッブズは、クラレンドン伯が言うように、帰国したいがためにクロムウェルに気に入られるように『リヴァイアサン』を書いたわけではなく[6]、国王であれクロムウェル政権であれ、自己の安全を保障する政治権力が安定的に確立された祖国へ帰りたかったのである。『リヴァイアサン』は「保護と義務との相互関係」（L, 491.）を理論的に明らかにするために書かれた。だがそれは、単にホッブズ個人や政治的支配層及び貴族のみを対象として念頭においているのではなく、民衆を含めた全イングランド人を視野に入れているのである。これについてはさらに次章第一節で考察するが、ここで言えることは、ホッブズの思想と行動はきわめて政治的なものであり、亡命や帰国という行動は、単に自己利益的であるのではなく、彼の政治思想に裏付けられたものであったということである。

一六五一年一二月、ホッブズはチャールズ二世（一六四九年二月にオランダで即位宣言）に、子牛皮紙装丁された手書きの『リヴァイアサン』を献呈した（B, 213.）。その年の春にロンドンで出版された『リヴァイアサン』はフランスにも持ち込まれていたので、亡命宮廷の貴族や聖職者たちは既に読んでいたことだろう。しかし、とりわけアングリカン聖職者たちが『リヴァイアサン』の教説を「異端としてあるいは王党派に敵対した教説として非難」し、チャールズ二世にホッブズを排斥するよう働きかけたので、ついにホッブズは亡命宮廷への出入りを禁止されてしまうのである。彼は『リヴァイアサン』第四部においてローマ・カトリック教会を徹底的に批判していたので、亡命宮廷におけるチャールズ二世の保護を失ったことは、カトリック国フランスにおいてカトリック聖職者からの攻撃に身一つで晒されることを意味した（V, xvi-xvii.）。また同時に、ホッブズの『市民論』を引用した革命政権擁護者のアンソニー・アスカムがスペインで、国王への反逆者の一人であるイザーク・ドリスラウスがハーグで、

それぞれイングランドの王党派によって暗殺されるという事件があった（VC, xciii. B, 214.）。これらのことは、ホッブズはもはやフランスだけでなく、プロテスタント国オランダにおいてさえ安全ではないということを意味した。イングランドはいまだ不安定な政治状況であったが、ホッブズの自己保存にとっては、大陸にいるより、より安全であることは明らかであった。こうして、かつて『法の原理』がホッブズをフランスへ逃れることを強いたように、今度は『リヴァイアサン』が彼をイングランドへ逃れるよう強いたのであった。

注

(1) 今井、前掲書、二〇九ページ。

(2) 同書、二二一―二二二ページ。

(3) 同書、二二四ページ。

(4) *The Elements of Law Natural and Politic*, ed. J. G. A. Gaskin, Oxford, 1994, p.xlvii. Quentin Skinner, "Conquest and Consent : Thomas Hobbes and the Engagement Controversy," in *The Interregnum : The Quest for Settlement 1646-1660*, ed. G. E. Aylmer, Chapter 3, Macmillan, 1972, p.94.

(5) カーリーはホッブズ、マーティニッヒは他者と主張している。*Leviathan*, ed. Curley, p.lii. B, p.180-181.

(6) Edward Hyde, the Earl of Clarendon, *A Brief View and Survey of the Dangerous and Pernicious Errors to Church and State, in Mr. Hobbes's Book entitled Leviathan*, Routledge/Thoemmes Press, 1996, p.317.

《訂正》

本誌『法政論集』掲載の拙稿「ホッブズの生涯（一）（二・完）」（第一八七―一八八号）、「ホッブズのリヴァイアサン―一七世紀イングランドにおける政治と宗教―（一）（二）（三・完）」（第一八九―一九一号）において『リヴァイアサン』の翻訳にあたっては、基本的に *Leviathan*, ed. Richard Tuck, Cambridge: New York, Cambridge University Press, 1996 および *Leviathan*, in *Thomas Hobbes Opera Philosophica quae Latine scripsit Omnia*, vol.III, ed. William Molesworth, (first edition, London, 1839-45) second edition, Bristol, Thoemmes Press, 1999 から訳出し、これらからの引用箇所のみを指摘した。訳出には、水田洋訳『リヴァイアサン』（一）～（四）（岩波文庫、一九五四―一九九二年）を参照させていただいたが、邦訳については引用箇所を示さなかった。ここに水田訳の引用箇所を付記し、その不備をお詫びするとともに、感謝の意を表するしだいである。以下、『法政論集』ページ数と行、原典ページ数（英語版はLラテン語版はOLと略す）、邦訳巻数とページ数という順に示す。

（梅田　百合香）

「ホッブズの生涯」

第一・八七号

42.3 OL, 548. 訳Ⅳ295.　46.11 L, 234. 訳Ⅱ264.

51.1 L, 126. 訳Ⅱ44－45.　56.16 L, 473－474. 訳Ⅳ134.

56.18 L, 124－125. 訳Ⅱ42－43.

63.17 L, 153－154. 訳Ⅱ101.

68.5 L, 77. 訳Ⅰ184.　74.9 L, 93. 訳Ⅰ219.

80.15 L, 154. 訳Ⅱ101.　81.14 L, 3. 訳Ⅰ32.

82.5 L, 491. 訳Ⅳ172.

第一八八号

279.15 L, 484. 訳Ⅳ160.　281.2 L, 139. 訳Ⅱ72.

281.8 L, 140. 訳Ⅱ74.　281.10 L, 140. 訳Ⅱ74.

281.14 L, 141. 訳Ⅱ75.　281.16 L, 97. 訳Ⅰ229.

283.5 L, 491. 訳Ⅳ172.　284.9 L, 462. 訳Ⅳ112.

284.12 L, 462－463. 訳Ⅳ113.　285.1 L, 469. 訳Ⅳ125.

288.1 L, 247. 訳Ⅱ288.　289.4 L, 88. 訳Ⅰ210.

291.13 L, 274. 訳Ⅲ63－65.　291.16 OL, 561. 訳Ⅳ317.

305.5 OL, 546. 訳Ⅳ291.　305.7 OL, 556. 訳Ⅳ305.

305.8 OL, 557. 訳Ⅳ305.　312.3 L, 473